第一一一九回

史跡めぐり案内（田島地区）

大円寺
龍渓寺
自然不動
大鳥神社

越谷市郷土研究会
理事　鈴木種雄

第一二九回史跡めぐり案内（目黒地区）

・日　時　二月二十六日（日）　午前八時

・行　き　越谷駅集合、午前八時二十六分発（浅草行き準急）

越谷駅――北千住のりかえ――日比谷線恵比寿――のりかえ――国鉄目黒駅下車

・コース　大円寺――行人坂――羅漢寺――目黒不動――青木昆陽墓――大聖院――大鳥神社――昼食

バス大鳥神社前――目黒区役所下車――目黒区守屋資料館――祐天寺――正覚寺

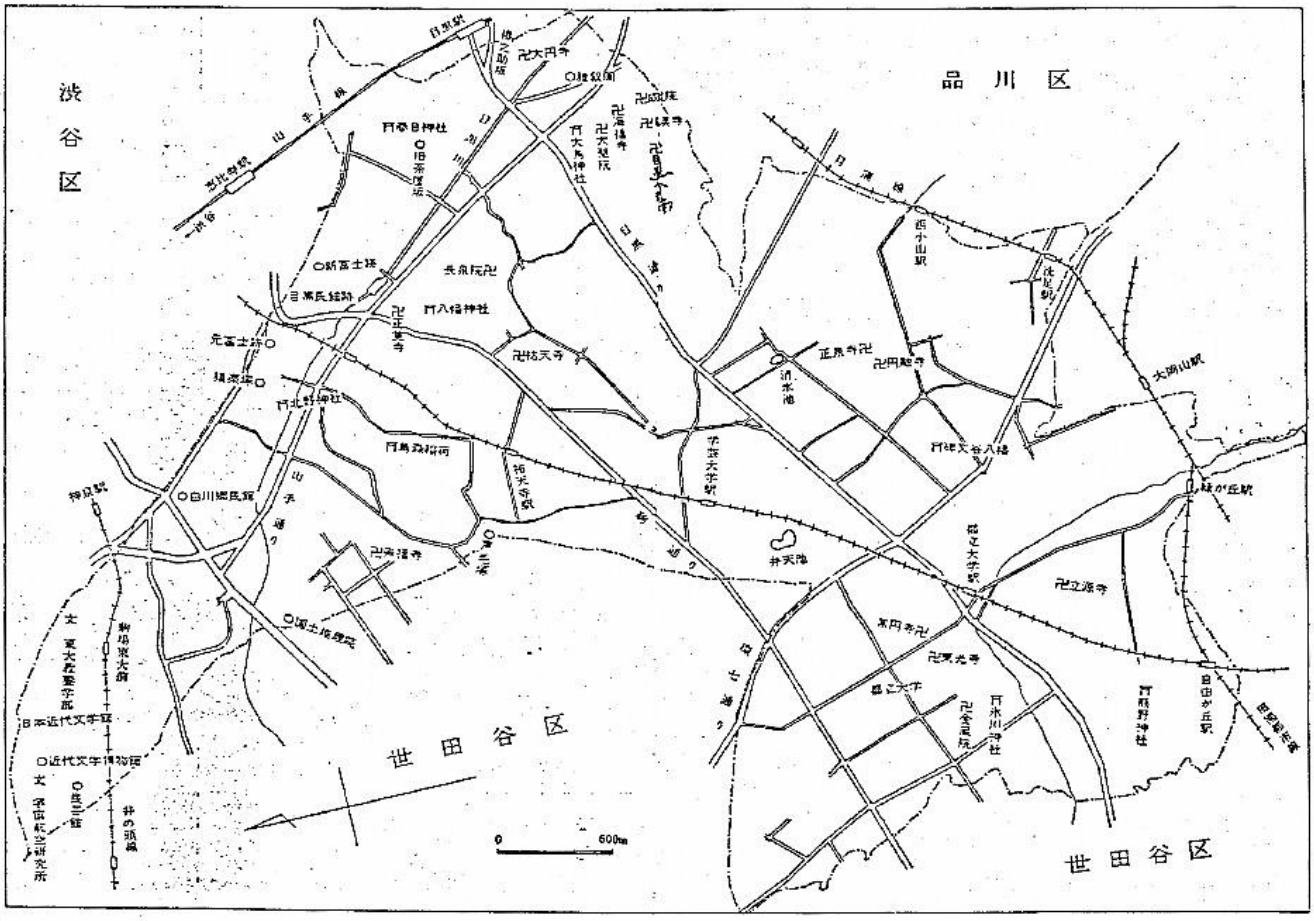
――目黒氏館跡

・帰　り　日比谷線恵比寿駅――越谷駅――解散

・案内者　鈴木種雄　理事

・会　費　一金　二千五百円也（交通費、拝館料、資料代、保険料他含む）

※但し昼食は各自持参のこと。


渋谷区
品川区
世田谷区
世田谷区
0
600m

目黒の歴史

1, 自然

目黒区は、武蔵台地の東南部に位置し、区の東部に目黒川の谷があり、西部に呑川（のみがわ）の谷があり又、此れ等の谷の支谷が台地を刻んでいて起伏の多い、坂の多い町を形成している。此の様に目黒の地形は、台地と谷から成り立つている。

又、台地の部分は、高い台地と低い台地に分けられ、高い台地は、区の西南部にある「荏原台」と呼ばれる台地の一部と、東北部の「淀橋台」と呼ばれる台地の一部にあたり、海抜三〇～四五メートルである。此の二つの高台の間に、海抜二五～三二メートルの台地がある、之を特に「目黒台」と呼んでいる。

水系は、目黒川・呑川・立会川の三流である。目黒台は淀橋台と目黒台の間を流れ、目黒川の谷は区内では平坦な谷底平野を持つている。立会川は、区内の碑文谷池と清水池に源を発し、世田ヶ谷区内荏原台から発している呑川と共に三流共東京湾に流れ込んでいる。

2, 原始時代

以上の様な目黒の自然を生活舞台として、人類が住む様になつたのは、石器時代からである。区内で現在確認されている石器時代の遺跡は四〇を越え、東京区部では多い方である。然も遺跡一ヶ所の規模でも、東山・諏訪山・油面・目黒不動・富士見台・柿の木坂遺跡・等広大な面積にわたるものであり、東京山ノ手台地上で目黒地域は、縄文文化の一つの中心地であつたと思われる。

此の様に分布密度の高いのは、自然的条件が、古代人の生活に適していた為であろう。目黒地域は豊富な湧水に恵まれ、広葉樹林には木の実が豊富に実り、食用となる動物類が多く生息し、河川には魚貝類が容易に取る事が出来た為であろう。

3, 古代

大和時代

目黒地域に大和朝廷の勢力が延びて来たのは、五世期頃と思はれる。（古くは、大鳥神社の縁起に景行天皇の御代、日本武尊の東征の時を創建としている）区内に散在する塚や其れに因んだ地名を調査すると、猿楽塚・法界塚・三合塚等幾つかの古墳が見出される。其の内淀橋台上の猿楽塚は、主墳・副墳の二つの円墳から成り、又三合塚は前方後円墳と見られ、現在でも昔の面影を残している。

目黒区に三田と言う地名があるが、一〇世紀の始めに記された「倭名抄」に武蔵国荏原郡三田郷が見える。此れは大化改新以前の天皇直轄地「屯田」（御田）に由来する郷名で後世三田と改められたものと考えられる。

奈良時代

大化改新以後の武蔵国には府中に国府が置かれ、国分寺が建てられ、国郡の制度が出来、武蔵国には二一の郡が置かれ、荏原は其の一つで郡内は九郷に分れ、今の目黒がどの郷に当るかは明らかでないが、三田・下目黒附近が三田郷に、碑文谷・衾の地域が覓々志郷（かがし）に属したと考えられる。

万葉集東歌に「赤駒を山野に放し捕りかにて、多摩の横山徒歩ゆかやらむ」と見える様に、当時此の地域には官牧

・私牧が各所にあり、馬牧に因んだ地名が多く残つている駒場・駒沢・馬込沢等の地名から、目黒附近には馬牧が多く存した事が解る。此の地に良馬を産したので、防人達が西辺の地にあつて東国武士の活躍を伝えられる基となつた

目黒の名は、馬「め」畔「くろ」をあらわし、馬牧から起つた地名であると言はれる。

荏原郡の防人の歌には

白玉を手に取り持ちて見るのすも　防人の歌
家なる妹をまた見てもや

草枕旅行く背なが丸寝せば　防人の妻の歌
家なる我は紐解かず寝む

我が門の片山椿まこと汝　防人の歌
我が手触れなな地に落ちもかも

平安時代

平安時代になると、武蔵国では馬牧が次第に荘園化し、官牧の管理者が牧を私有化し、私牧の土豪達と共に荘園の拡大に努め私財を蓄え勢力を増した。武蔵七党の一つ横山党の流れを汲む目黒氏の管理した「目黒牧」と言うのが記録には無いが、同様であつたと推測出来る。

目黒の名刹、下目黒不動・碑文谷の円融寺等は平安時代初めの頃当地の人々の信仰の霊地として創建されている。

4, 中　世

鎌倉時代

平安時代の終り頃、目黒の地には荘園主として目黒氏が拠していた事が推定出来るが、鎌倉時代の建久元年（一一九〇）源頼朝上洛の供奉人、畠山重忠以下三一三人中に目黒弥五郎の名が見え又、頼朝が論功行賞を行つた際の功賞状の中に目黒領目黒太郎義政の名と地名が有り、当時目黒の地に目黒氏が荘園主として館を構えていた事と思われる附近に「鎌倉街道」の内「中つ道」が通つている。重要な武蔵・上野・下野への交通の要衝であつた。

室町時代

源氏の実権は、執権北条氏の手に移り、文永・弘安の役を経て北条高時の時、元弘三年新田義貞の軍に鎌倉を攻められて北条氏は滅亡し、足利氏が登場して来る。尊氏により室町幕府が開かれると、目黒地域には吉良氏の名が見えて来る。鎌倉公方と京都足利家の不仲は公方と上杉氏との争となり、武蔵武士は其の中にあつて骨肉相食む戦となりやがて上杉氏も、山ノ内と扇ケ谷の内紛により益々複雑さを増した。此の間隙に、伊豆に興つた伊勢新九郎長氏は伊豆・相模を平定し武蔵に侵攻して小田原北条の支配となる

目黒地域では中世の痕跡である板碑は少く、円融寺・目黒不動附近其の他に十数基が確認されるが、年号の確認出来るもの九基、内五基が南北朝期で、北朝年号である。目黒の武将は北朝に味方していた事が知れる

5, 近　世

江戸時代

北条氏支配下にあつた目黒地域は、天正十八年（一五九〇）八月一日徳川家康関東に入府と共に一辺した。三田村・上目黒村は幕領、中目黒村は増上寺領となり、後に目黒不動の門前町として栄えて来たので、寺社の境内・門前町

の総てを町奉行の支配とする幕府の方針に従い中目黒下目黒は町となり幕領となつた。

目黒は、江戸が政治経済の中心としての地位が定まると急激に人口がが増え発展して全国一の都市的城下町となつつ来た為に、野菜の供給地となり又、目黒不動や碑文谷仁王など江戸市民の信仰行楽地として繁栄した。

野菜作りは始め副業的に作られたが、中目黒舘木家文書によると、菜・大根・茄子・瓜・芋等が江戸へ出荷された事が記されている。又「太く・柔かく・美味しく」と三拍子揃つた目黒の筍や目黒節成胡瓜等は有名であつた。

江戸時代中頃になると、武家の力が次第に衰え、町人が経済的地盤の上に力を貯えてきた。経済的ゆとりが出来る。と行楽地を求め、信仰と散策を兼ね盛んに郊外の目黒辺に出かけ楽しんだ。目黒不動・大鳥神社・金比羅の三社は「目黒の三社」と言われ又、目黒七福神等有名で滝前町等は門前町として賑い発展した。江戸よりの行程・美しい自然・由緒ある寺社等の多い目黒は江戸市民の欲求を満す好適な場所であつた。

将軍の鷹狩場

家康は、かつて同格であつた大大名の参勤に対し、鷹狩に事寄せて目黒から品川に廻つて出迎え、其の労をねぎらうのが例であつた。

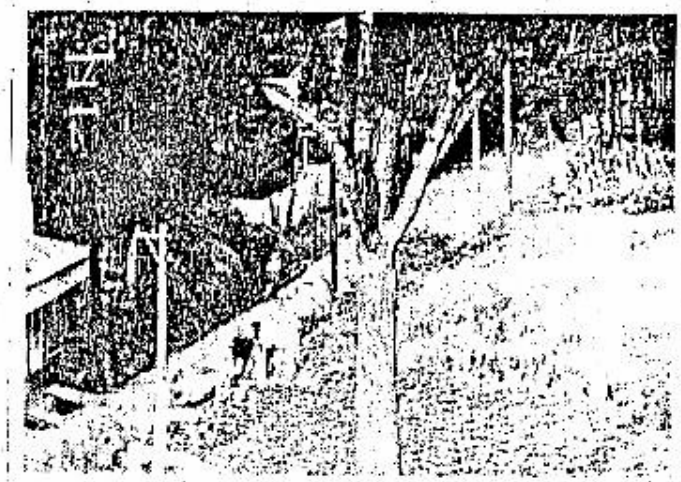
目黒地域は好適な鷹狩場として、代々の将軍が遊猟に来た。駒場・中目黒・下目黒・碑文谷の各旧家には、家康以来の鷹狩に関する伝承や文書が多数残されている。

中目黒の一軒茶屋は、茶屋坂の彦四郎の子孫が営んでいたが、島村金一家の文書によると、一軒茶屋には寛永年間に家光が訪れてから嘉永年間まで約二三〇年の間に三十数回も将軍家の御成が記録されている。

将軍家とゆかりの深い「目黒のさんま」の話しで知られる爺が茶屋と家光によつて本堂始め広大な仏堂伽藍の造営寄進が行なわれた目黒不動の二ヶ所は、後吉宗の恩恵も受け一層有名となり、歴代の将軍達も目黒筋の遊猟の際には爺が茶屋と目黒不動に立ち寄るのが例わしとなつた。

将軍家の度々の御成りと鷹狩の為に、村々の道路は改修され橋が架けられ、鳥見役が常駐される様になつた。

駒場はもと鷹狩場であつたが、幕末には幕軍の洋式軍事訓練や砲術訓練がしばしば行なわれた、後三軒茶屋の野戦重砲連隊のもとである。



昭和初年の二子道

行人坂と古事

行人坂の名の起源

下目黒の東北・大崎との境界にある丸子道の急坂が卽ち行人坂である。往時右側には富士見茶屋・淨覺寺があり、左側には般若塚・大圓寺等があり。目黒不動への參詣道として往き來頗る賑はつたものであると云ふ。そして又た此處からは雜々が物語が生れて居る。その名の起源に就ても亦た色々の說があるが、『江戸名所圖會』では

行人坂とは、白金茶町より西の方、目黒へ下る坂を云ふ。寛永の頃、羽州湯殿山の行者此に大日如來の堂を建てたる所なり、又た五百羅漢の石像あり、明和九年の造立とす。

又た『新編武藏風土記稿』には、此の坂效に大圓寺の事に關して、左の如き事が揭げられて居る。

下目黒村の東北の堺にあり、寛永の頃此處に湯殿山行人派の寺ありて、大日如來の堂を建立す、依て此名あり。今坂の中程に大圓寺と云ふ天滿行人派の寺あり、是がその名殘なるべし。

尙ほ目黒佛敎聯合會編大圓寺緣起に依れば

抑も當山は人皇百九代後水尾天皇の御代寛永年間に創建せられたり、今詳しくその由來を尋ぬるに、當時德川家康公江戸城に登り天下を統治するに及び、城南の地に不良の徒多く住し、善人を苦しめ不安常に絕ざるを憂ひ、公特に湯殿山の高德大海法印を呼び給ふや、此時西南目黒の里なる此地に瑞相忽然として現れ靈異ありしかば、大海法印直ちに湯殿山より大日如來を勸請し、釋迦如來を本尊として一宇を建立し、多くの行人を住せしめたるに、不良の徒何處とも消え失せたるを以て、公大いに喜び、大圓寺の寺號を給へり、蓋し行人坂なる名稱は此時より始めしものならん。

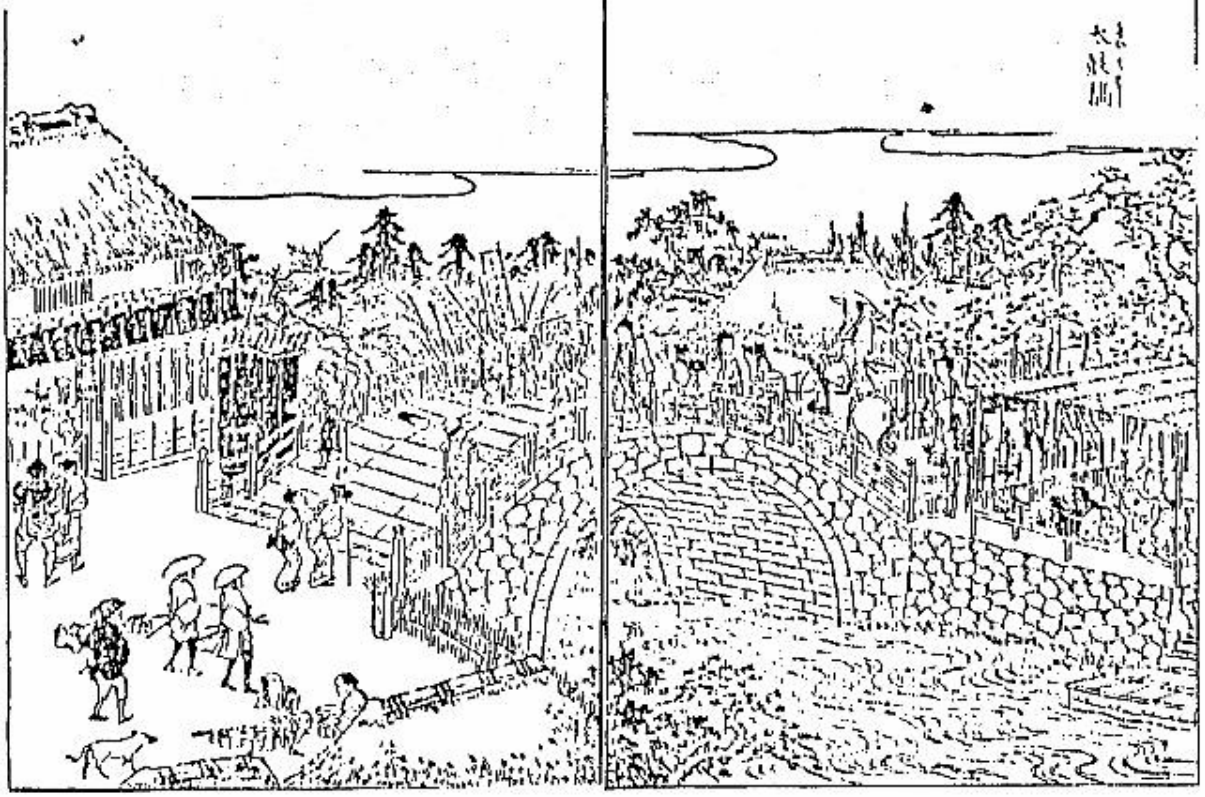
等々と諸說があるが、之を綜合して考へると、大日如來堂と云ふのは取りも直さず大圓寺の事で、湯殿山の行者とは大圓寺の開山大僧都法印大海の事であらうと思はれるから、行者を住せしめた寺卽ち行人の居る寺のある坂と云ふことから行人坂の名稱が起つたと見る點は、三つとも殆んど一致して居る。

明和九年行人坂の火事

帝國地名辭典に就て行人坂の火事を索ると『明和九年(一六三年前)二月二十八日目黒行人坂より出火、折柄西南の烈風なりしかば、白金・麻布・飯倉・西丸下より下町を燒き拂ひ、神田・下谷・淺草を燒き千住に延燒せり。同夜本郷丸山より出火、神田・日本橋・京橋邊を燒き翌日に至り降雨の爲め鎭火す。是に於て江戸市中概ね灰燼となる。之を行人坂の火事と呼び、明暦の火事と並稱さる。』とある。明暦の大火は、世に所謂『振袖火事』の事であつて、本郷丸山本妙寺から發したものである。此の辭典には行人坂の火事のその夜に、矢張り本郷丸山からも出火したと記してあるのは、後に記す如く丸山田町が火元であつた。又『新編武藏風土記稿』には『明和九年大圓寺失火し、延燒して江戸に及び、側へ御城中御櫓までも此災に罹りしかば、御咎を蒙りて本堂再建の事を許されず、大日如來及過去帳以下隣寺明王院に收む。境内の地に五百羅漢の石像立てり、此の災の爲めに命を殞せしものゝ爲めに後人營みしと云ふ』と記してある。

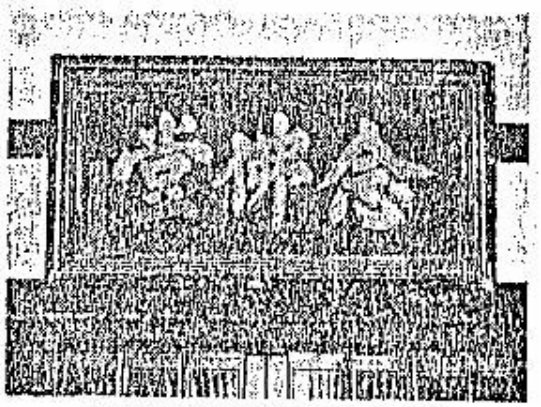
六百三十箇町燒燼

安永元年二月二十九日、江戸の過半を燒き拂ふ樣な火事が起つた。此の日は西南の風が激しくて、紅蓮萬丈天日爲めに暗いと云ふ位ゐ、午の刻に至つて目黒行人坂の大圓寺から火を失し、延燒して火は二手に別れ、一方は永峰町辺り白金在家・麻布邊すつかり燒き、三田綱町邊・狸穴・飯倉・市兵衛町・霞南坂を燒き、一方は西久保・櫻田・赤ヶ關・虎の門・日比谷門・馬場先門・櫻田門・和田倉門・常盤橋・神田橋門等を燒き、それから門内にある諸侯の邸第をみんな燒き、日本橋南は通り三・四丁目の西側元四日市町・濱町・西河岸邊から南傳馬町・中橋まで、北は本町・石町・四神田の町々武家屋敷全部を燒き、駿河臺・昌平橋・筋違橋門・外神田の町々、神田神社・聖堂・湯島神社その附近全部、上野仁王門・山王社及び下寺全部、淺草三味線堀・下谷邊廣小路・徒士町・車坂・坂本・入谷・金杉・箕輪・吉原町・小塚原・千住大橋向揚部宿に至るまで、淺草方面は廣德寺前通り新堀・阿部川町・鳥越邊本願寺・淺草寺・傳法院及寺中、馬道・田町・新橋までも延燒した。また夕方六ツ時には本郷丸山田町から發火し、それから森川宿・追分・駒込・白山・鶏聲ヶ窪の入口まで、駒込・巢鴨・千駄木入口根津・谷中感應寺・笹坂・根岸と燒けのびた。翌三十日には風が變つて北風となり、または東風となり、常盤橋門外の火は更にのびて大傳馬町・馬喰町二丁目まで濱町邊・堺町・葺屋町・小網町・大坂町・田所町・蠣殼町・住吉町・伊勢崎町・駿河町・室町・日本橋・中橋・京橋にまで及んで未刻になつて風がやみ大雨がふり出して、漸くどの方面の火も消えた。右の火事で燒けた町數が六百三十、その長さ六里・幅一里・死者無數と註された。



㊹ 太鼓橋
下目黒1
行人坂下

目黒川にかかっていた明和6年完成のアーチ型の石橋。広重の「名所江戸百景」の中にも描かれていた。大正9年豪雨のため流失。今は新しい橋に名前だけが残されている。



明王院念仏堂の瑞垣（上目黒の瑞泉寺蔵）

㊺ 大円寺　下目黒1－8

行人坂　元永の初め、湯殿山の行人大海法印が急坂を切り開いたので、行人坂と呼ばれる。

大円寺　天台宗　大海法印が大日金剛の像を祀って建てたと伝えられる。明治18年、近くにあった明王院が廃寺となり、仏像や墓碑が大円寺に引き取られた。八百屋お七の恋人吉三の伐身、西運和尚の墓や遺品もある。

五百羅漢（都指定文化財）　北側の斜面には釈迦像を中心に十六菩薩像・十六羅漢像が並び、それを囲んで491体の五百羅漢像などの石仏群を安置。この石仏群は明和9年の江戸大火の焼死者を供養したもの。

清涼寺式釈迦如来立像（区指定重要文化財）　正面護摩堂に安置され、京都嵯峨の清涼寺式の生清釈迦像で、等身大、かや材を使った寄木造の優美なもの。胎内の銘には建久4年（1193）の銘があり、この種の像では古いものという。

目黒川架橋供養勢至菩薩（区指定文化財）　門前左上方の堂内に安置されている勢至菩薩の台座の前面と両側面には江戸中期の目黒川架橋のことを物語る銘文が刻まれている。

行人坂敷石造道供養碑（区指定文化財）　念仏行人が目黒不動尊と浅草の観音とを手日参詣し、その功力で行人坂に敷石の道を造り、その成就と往来の安全とを供養祈願した銘文が陰刻されている。また銘文には元禄16年（1703）の紀年がある。江戸と目黒の往来を結ぶ行人坂開発の歴史を知る貴重な資料である。

清涼寺式釈迦如来像（大円寺）

明和九年は、大火のほかに諸国の水害もあり、年号を安永と改めたが、なお天災は止まず、

年号は安く永しと変れども
諸色高直いまに明和九

という落首もつくられた。

明和九年の火元寺は幕末の嘉永元年（一八四八）になり、やっと島津侯の力によって再建され、その時五百羅漢は現在の場所に移建された。この羅漢像は明和大火の遭難者供養のために建立されたというのが定説だが、東京都教育委員会の調査によると、石像にはそういう銘記がないそうだ。しかし都内唯一の石造五百羅漢ということもあり、昭和四五年に都の文化財指定を受けた。（渋谷出張所）

ところで、この寺には八百屋お七にまつわる伝説がある。これもまた火事に関係のある話。

お七は恋しい小姓の吉三に再会したいばかりに自家に放火して捕えられ、江戸市中引廻しのうえ、鈴ヶ森で火刑に処せられたという。

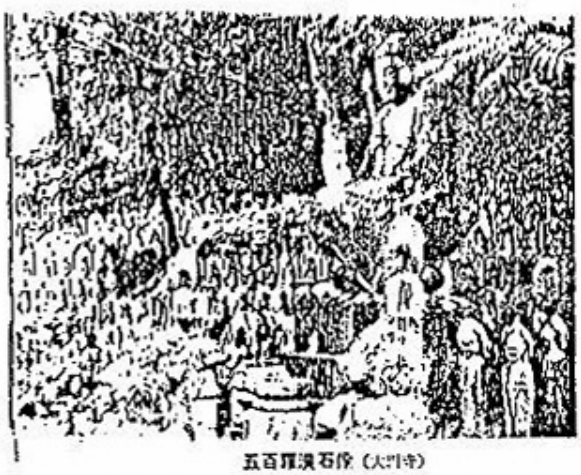
井原西鶴の『好色五人女』をはじめ数かずの物語に出かれ、「お寺さんは駒込の吉祥寺」とのぞきからくりの語りにまで残っているが、諸説紛々として真相は不明である。

小姓の名はじつは左兵衛で、吉三はお七を煽動したならず者だともいう。その吉三だか左兵衛だかが、お七の菩提をとむらうため剃髪して西運（一説に西念）となり、行人坂にの明王院境内に念仏堂を建てたという（玉日黒羽福寺の項参照）。その明王院という寺はもと大円寺の下にあったが、明治の初めに廃寺となり、建物は羽福寺へ売られたが、仏像仏具などは大円寺へ引きとられた。その中に西運の像や念仏鉦がある。彼はその鉦を叩きながら浅草観音へ往復し、一万日の念仏修行をしたという。寺には西運とお七の関係を記した由来書もあるが、これは伝説としておく方が無難であろう。しかし、西運という僧がいて、坂を改修し、橋（来橋か）を架設したなどの史料は存在しているし、墓も大円寺の墓地にあるから、お七との関係は別としても、社会奉仕に努めた善僧が明王院にいたことは確かである。

しかし、今では吉三伝説の石碑まで建てられるようになった。

——吉三死心——

ただたのむかねの音きけよ秋の暮



五百羅漢石像（大円寺）

大円寺

下目黒1丁目8—5

天台宗，滝泉寺の末寺。寛永年間（1624～1643年），湯殿山の行人，法印大海が行人坂に大日如来堂を建てたことに始まると伝えられている。境内には，都内唯一の石造五百羅漢像（都有形民俗文化財）がある。同寺は“振袖火事”“車町火事”と並ぶ「江戸三大火」の1つ，明和9年（1772年）の“行人坂火事”の火元となった寺である。城中のやぐらまで火災が及んだため，70年間も幕府から再建を許されなかった。五百羅漢は，この明和大火の遭難者供養のため建立されたものというのが定説となっている。本尊の清涼寺式木造釈迦如来立像は，昭和32年に国の重要文化財に指定された。また裏山には，八百屋お七の恋物語の吉三の後身と伝えられる西運和尚の墓がある。

清涼寺式釈迦像

西暦三八五年に漢訳された増一阿含経第二十八巻に「仏在世の時一夏忉利天（トウリテン）に昇って母のため説法された時、優填王（ウテンオウ）旃檀を以て如来の像を作る高さ五尺」と書かれている。釈尊在世中に像が作られたとは信じられず単なる伝説と思われる。

永観元年（九八三）三論宗の僧奝然（チョウネン）が入宋して大蔵経五千巻とともに釈迦立像を将来してきた。この像が三国伝来の様式を伝えるといわれている清涼寺の釈迦像で赤旃檀で作られている。

奝然は中国五山に模して清涼寺を建立しようとしたが果さず、京都嵯峨にあった棲霞寺の横に釈迦堂を立てて、それを安置した。その後棲霞寺はおとろえ、釈迦堂が清涼寺として栄え、今日に至っている。

鎌倉時代になると、釈迦崇拝の復古思想が盛んになり、この像の模刻が各地に行われるようになった。

羅漢

正式には阿羅漢といい梵語アルハット Arahat の音写である。尊敬供養を受けるに値する者の意である。意訳では応供（オウグ）と訳されている。大乗仏教が興ると小乗の声聞（ショウモン）と呼ばれる部類の人が到達する四階位の最高位の名となった。教理上は一切の煩悩を断滅して清浄の智慧を得、修学を完了して、もはや学ぶべきことがなく、世間の供養を受くべき位に至ったものと定義され、仏とは同一ではなくそれより一段階下位とされている。

後には賓頭盧（ビンズル）を始めとする十六人の弟子を十六羅漢とし、さらに五百羅漢がある。わが国では画像・彫像等たくさん作られ功徳を讃嘆することが盛んに行なわれている。

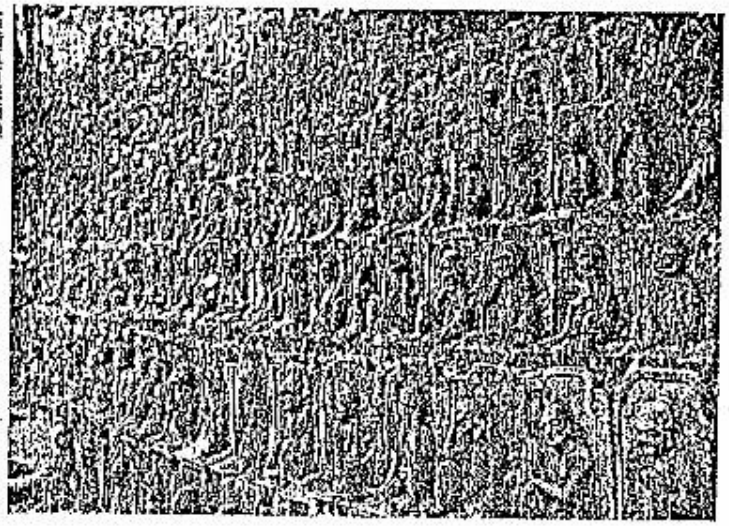
●大円寺の五百羅漢

明和九年（一七七二）の旧暦二月、まだ冷たい風が吹き抜ける江戸の街を、またたくまに焼き尽くした大火があった。紅蓮の炎は地球上最大の都市江戸を一瞬にして地獄絵と化した。黒ずんだ火炎は不落を誇る江戸城の櫓を焼き、逃げまどう数万の市民の生命を奪い去った。火元はこの大円寺であったという。ために幕府は大円寺の再建を認めなかったのである。

『武江年表』には「（安永元年）二月二十九日、乾より西南の風烈しく、土烟天を覆ひ日光朦朧たり、午の刻、目黒行人坂大円寺（天台）より出火して（中略）長さ六里幅一里、大小名藩邸寺院神社町屋の類焼し、焼死怪我人其の数を知らず（中略）大火後行人坂大円寺再建無し、其の後へ或る人、五百羅漢の石像を造立す」として、類焼町名を詳細に列記しているのである。

石造五百羅漢　『武江年表』の前引文章にもあるが、石造五百羅漢は、大円寺の山門を入って左手に雛壇状に並んでいる。前に小さな池をおき、うしろは崖を利用している。そのためか地下水が崖を伝わってにじみ出ている。

高さ一四七センチの釈迦牟尼仏坐像を中心として、獅子に騎した文殊菩薩像、象を駆る普賢菩薩像が左右に従い、十大弟子や十六羅漢とともに一群をなしている。それら仏像のうしろに五百羅漢の群が並ぶ。



石造五百羅漢像

行人坂　村の東北の堺にあり、宝永の頃此處に潅頂山行人塚の寺ありて大日如来を建立す、依てこの名あり、今坂の中腹に大円寺と云天台行人塚の寺あり、是その名残なるべし、

祠なり、○明王院　寺内平貫地百六十九坪、行人坂の下にあり、天台宗、村内瀧泉寺末、松蔭山護林寺と號す、相傳ふ今より八十年前當所に護林寺と號してわづかの庵室あり、四運上人といへる念佛三昧の僧こゝに開樹す、ゆへに四運堂とも呼ぶ、その背後に明王院といふ古宗の寺あり、これは御入國の頃正願坊と云僧の開闢せし寺なりしが、その頃四運己が庵室の地へ移して、その寺號を用ひて一寺とせり、本堂六間に五間、念佛堂の三字を扁す、本尊阿弥陀如来、坐像にして長五尺、傳教大師一刀三禮の彫刻なり、　寺寶十一　又御運大黒天の像在り、長六七寸容殿に安、

面観音像一軀　長五尺、木佛立像、其彫刻外國の作と見ゆ、子安観音と稱す、（東海道名所路鈴）と云書には、弘法大師の作と記せり、元禄十年前松平土佐守寄附す、　子安石一顆　観音の前に依り、信州佐久郡三塚村より出現法印感得すと云傳ふ、　弊天祠　門を入て左にあり、九尺四方、神體は木像、長六寸弘法大師竹生嶋の神勅によりてつくる、松平周書同寄附す、　夕日山本堂の背後にあり、観音堂にて紅葉の賞あるものはたゞ品川海晏寺と當所のみ也、

○大円寺　平貫地千六百六十二坪、明王院の隣なり、天台宗、行人坂羽黒派にて護恩寺末、松蔭山と號す、開山慶大僧都法印大海正保三年十月廿九日寂す、第七世中興開山慶僧都死伯明和八年八月朔日寂す、同九年二月當寺炎火し延焼して江戸中に及び、御用城中御殿もこの災にかゝりしゆへ、御料を蒙り本堂再建のことを許されず、本尊大日如来及び諸尊仏像以下開寺明王院に收む、境内の地には五百羅漢の石像なたてゝあり、この火災の為に命をおとせしもの、為に後人弔みしと云、　○浄覚寺　平貫地四百五十坪餘、行人坂上にあり、浄土宗にて久林山と號せり、門前に石階十

目黒の五百羅漢

ある仏師の物語　正保五年（一六四八）京都で生まれた一人の仏師が、摂州で黄檗宗瑞龍寺の鉄眼和尚の教えを受けた。やがて師のもとを辞した彼は遊行の旅に出て西へ向かった。時には聞いていた豊前耶馬渓の羅漢寺に立ち寄り、ここで石像の五百羅漢を拝したとき、その迫力に圧倒されたという。それ以後かの仏師には心に期するものがあった。

貞享の頃（一六八四―八八）、かの仏師は武蔵、すなわち江戸に下って浅草寺の枝院に寄寓し、おのれが命の続く限り仏像を刻むことを心に深く誓った。寝食を忘れること十有余年、ついに丈六釈迦仏をはじめ五百余躯の仏像を造りあげたのである。「其花容之微妙、坐立之威儀、儼然如生」き姿は、みる人をして息をのませた。

しかし、高泉和尚に請うて開眼したものの、これら仏像を安置する場所がなかった。元禄八年（一六九五）夏五月幕府の聞くところとなり、現在の江東区大島の地にあった永井伊賀守の邸を与えられた。木造千五百畝、仏師はこの地に屋を架して仏像たちを安置して天恩山羅漢寺と号し、請うて師鉄眼を開山の祖となした。

すでに煩悩することもなく、宝永七年（一七一〇）秋風の立つ旧暦七月十一日、彼は毫然として不帰の旅立ちをした。時に年六十二、この仏師こそ開悟松翁禅師その人であった。

松翁禅師肖像

羅漢寺

下目黒3丁目20—11

黄檗宗の寺院で，元禄8年（1695年）に松雲元慶禅師が本所五ツ目通り（今の墨田区）に創建。明治20年，本所緑町へ移され，さらに同42年，現在地へ移転した。

松雲禅師は，もと京都の仏工。九州耶馬渓の羅漢像を見て一念発起し，師鉄眼の教えを受けつつ，江戸で羅漢500体のほか，釈迦三尊など38体を完成させた。そして元禄8年，将軍から広大な土地と「天恩山羅漢寺」の号を与えられたのである。

●五百羅漢像

羅漢とは阿羅漢のことで，小乗仏教の悟りを極めた修行者であって，世間から尊敬を受ける資格のある聖者を指す。五百羅漢は，仏滅後，第1回の結集（けつじゅう）に参加した500人の阿羅漢のことである。

羅漢寺の五百羅漢は木彫で，全部松雲禅師が自ら彫刻したという珍しいものである。長い年月の間に破損・散逸して，現在は287体しかない。像の表情はすべて違い，夢を食うという獏（ばく）の像や，仏はわが胸中にありと開腹してみせている像など，見て回れば興味は尽きない。

木造釈迦三尊・石造松雲禅師塔とともに，都有形文化財に指定されている。

●原爆殉難碑

大きな自然石に「原爆殉難碑」と彫られ，その右に「移動演劇さくら隊」，左にはサイン風に「徳川夢声書」とある。

広島で被爆し，倒れた9人のさくら隊員の慰霊碑である。同寺の2代庵主小久江慈雲尼が，さくら隊員や故夢声氏と親しい間柄にあったため，同寺の境内に建てられたという。

●鐘　鐘

安永3年（1774年）江戸の鋳物師，藤原重行の作で，国の重要美術品。昭和26年に日比谷の世界平和祭に出品され，「平和の鐘」と呼ばれた。

●お鯉観音

昭和初期，廃寺同様となっていた当寺の復興のため，身命をかけて努力してくれたのが安藤妙照尼である。妙照尼は，もと新橋の芸妓“お鯉さん”である。遺言により，本堂前の観音像の下に納骨され，その観音像は「お鯉観音」と慕われている。

五百羅漢（羅漢寺）

もと黄檗宗で，現在は無宗無派。元禄8年，松雲禅師が本所に創建し，明治42年ここに移された。釈迦三尊・五百羅漢はすべて松雲禅師の作で，現在300体余り残されている。都の指定文化財。➡

屋上の鐘楼は国の重要美術品の認定。（有料）

原爆殉難碑

羅漢寺鐘楼

滝泉寺（目黒不動）

下目黒3丁目20—28

天台宗泰叡山寛永寺の末寺で，目黒不動尊縁起によれば，「慈覚大師が少年時代，現在の地に宿をとったとき，神人の夢を見た。その後大師が青年になり，唐に留学して，ある日長安の青竜寺を訪れ不動明王を拝んだら，それが少年のころ霊夢に感じた神人と同じ姿であった。大師は奇異に感じ，帰朝後さっそく不動尊像を彫刻し，これを目黒の地に安置した」とある。

慈覚大師創建ということは，確かな根拠があるわけではなく，おそらく大師が東国下野（今の栃木県）の出身であったということから，関東・東北に多い慈覚大師創建と伝える寺院が多いことと軌を一にするものであろう。

創建の年代についても，弘治3年（1557年）堂宇改築の際，棟札に「不動明王心身安寧呪願成就，滝泉長久，天安2年」とあるのを発見したという伝えや，貞観4年（862年）清和天皇から「泰叡」の勅額を賜わったという伝えもある。また，「目黒不動尊縁起」は大同3年（808年）開山，天安2年（858年）堂宇造営としているなど，創建年代については天安2年説，貞観年間説，大同3年説など幾つかの説があるが，いずれも確かな根拠があるわけではない。

江戸五色不動の一つに数えられた由緒ある不動尊で毎年，約150万人の参拝者が訪れている。

●家光公が大伽藍を建立

3代将軍家光は，深く当山に帰依していたので，寛永11年（1634年）堂宇を造営した。当時は元和元年（1615年）の火災で仮本堂しかなかったため，本堂を再建し，鐘楼・観音堂・仁王門を修造，また種々の仏像・宝物を寄付したのである。さらに目黒筋に遊猟の際，鷹狩を寄せるために御殿を新設するなどして，たちまちのうちに旧時以上の宏壮華麗な寺になったという。

以来，幕府の保護が厚く，江戸近郊における最も有名な参詣行楽地となり，門前町もにぎわった。湯島天神・谷中天王寺とともに，「江戸の三富」と呼ばれた富くじが行われたことも，繁栄の一因となった。

大伽藍は，戦災で焼失したが，それらの堂塔は昭和24年に再建された。しかし，同53年5月，再び本堂を焼失した。56年中の大本堂完成を目指し，再建工事にとりかかっているところである。

●独鈷の滝

慈覚大師が長安の青竜寺に清い滝があったのを思い出し，試みに独鈷（煩悩を打ち砕く仏具）を投げたところ，たちまち泉がわき，滝となったと言い伝えられている。

二条の清水が銅製の竜口から注いでおり，不動堂の水垢離場となっている。近年水量は減ったが，一年中水が切れることはない。

●前不動堂

独鈷の滝の左手にあり，本尊は木造不動明王立像で，庶民信仰の便を図ったものとも，本堂に祈願するための宿を営む修業の場であったともいわれる。

堂にかけてある「前不動」の額の筆者が，享保7年（1722年）に亡くなった佐々木玄竜であることから，それ以前に建てられたものであることがわかる。

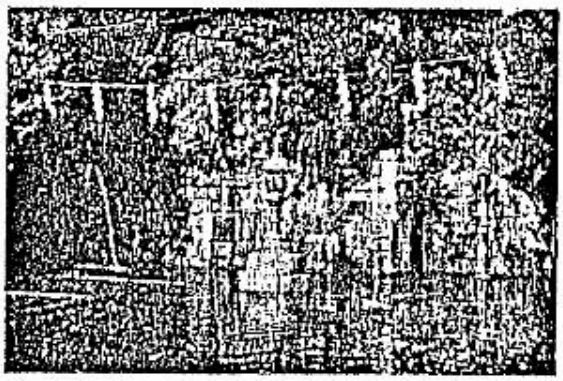
昭和48年に復元工事が完成，当時の美しい姿に再現された。

●青木昆陽の墓

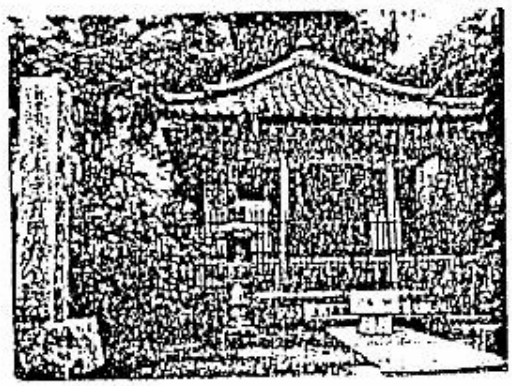
サツマイモの先生で知られる青木昆陽の墓が，滝泉寺裏の墓地内にある。この墓碑は，昆陽が生前邸内に立てておいたものといわれ，碑の正面に「甘藷先生墓」と楷書で書かれている。

毎年10月28日には，甘藷先生をしのんで「甘藷祭り」が開かれ，サツマイモや大学イモを売る店などが出て，大勢の参拝客でにぎわう。

昆陽が亡くなったのは明和6年（1769年）10月12日だが，同寺の縁日にあたる28日に供養を兼ねて，祭りをするようになったのである。



独鈷の滝



前不動堂

青木昆陽の墓

五色不動と信仰

江戸時代徳川氏は江戸鎮護のため五色の不動尊を江戸の五カ所に安置した。この五色の不動のうち目白、目黒、目赤の不動を三不動と呼び、この三不動に目青、目黄の二不動を加えて、これを総称して五色不動と称した。

五色不動尊の五色の意味は、密教では宇宙のすべての現象は地、水、火、風、空がその本体であり、この地、水、火、風、空の色彩で現わしたものが青、黄、赤、白、黒の五色であるといっている。またこれに対し五色不動とは目に色があるのでなく、五方眼、東、西、南、北、中央の五方角を意味するもので、目白、目黒、目赤、目青の四不動はすでに将軍家光以前よりその名は知られていた。将軍家光はこの四不動にさらに目黄不動を加えて「五眼不動」としたのは家光の寛永年間中期のころである。

なお因みに五色の意味については新仏教辞典に「（梵）パンチャ、ウァルナ五正色、五大色と訳）青黄赤白黒の基本色をいい、インドの教団では法衣に用いてはならない色とされ、華美の色と思められた。極楽浄土の荘厳の色や千手観音の持ち物の一として五色雲があり、密教の五智、五仙、五字等の教義や方向に配当される」云々とみえている。

いずれにせよ以上五色不動中目白不動は三不動さらに五不動中の随一と考えられ、徳川幕府に篤く尊崇され、武家、庶民層にも深く信仰され、その加護を蒙るものも多く、その名は全国的に知られていた。目黒不動も目白不動とともに有名で、その霊験あらたかで信仰者が多く、今日の目黒の地名は不動尊に由来するといわれている。目黒不動の隆盛は、三代将軍家光がこの地に鷹狩りに立寄られて以来家光の帰依を得たのにはじまる。また目赤不動は伊賀国赤目山の住職万行和尚（修験者）が不動明王を持仏として回国の修行し、この修験者の定着によって信仰者を多く集めるようになった。

新編武蔵風土記稿巻之四十七

不動堂　境内除地四千五百坪、寺領千五百坪、宇入家にあり、堂の大さ七間半に五間半、南上にあり、相傳ふ本尊は弘法大師作十三の時靈夢に感じて彫刻せられしと、立像にして長一尺七寸常所動詰のことは案由を詳にせず、或は云常山は推古目本武はた祀り、其頃は土人荒人神と號しける、然るに慈覺大師本国下野国より、常山へ登ちんとして此地にやどりしとき、農民夢申けるは、常山荒人神はもと日本武尊を崇まつれり、如こは神社を彫刻し給ひ神殿へ移したまはれと、大師やがて不動尊の像を彫刻して内陣へ納めしとぞ、しと日本武尊を祀りし伊、不動動詰の後し鳥居なたて置と云、近き頃まで五月十五日を祭礼と定め、村民戸ごとに供物などを設て供へしとぞ、一説に元和元年の春側の在家より火出て堂塔殘らず焼亡す、靈像は纒水の上に飛去て災を免れしと、これも信仰の益かゝる説なりしにや、その實は人のもちざりけんもしるべからず、寛永元年の秋大能院殿常所御遊覧の時、御社殿の廢それけるに、時の別當貴榮に命ぜられて御營の再び御り来らんことを請ぜしめさせ給ひしかば、忽飛来りて堂邊の若松に止る、秋に御感ありて御手自筆へさせ給ひし、忽御手にうつりけり、此時上意ありて木堂御建立ありその餘早尾組現、大行事組現、御供所、鐘楼、觀音堂、二王門、開山堂を修造せらる、又本堂より東の方に御殿を經營あり、御遊園の時は者羽を寄られしとぞ、同十一年不動堂御再造あり、奉行は芦三郎左衛門、三宅太兵衛なり、此時種々の仏像寶物等御寄附あり、本尊の側に別組現を安す、此門外にて餅花と稱し、木の小枝などに五色の餅を附て寶れり、常所の名産にて是を取するものは下目黒町に住す、故に其町の俗に　寶物寶鈴一振　天國作、不動尊厨子中に納む、長一尺ばかり、　平々十二月提鈴とて

明鏡あり、或は云元来荒人神組座の時、北寶鈴を神鏡とせり、不動尊の像は寶鈴に組を並て作りしものなりと、未其是非なし

護摩壇五間　寛永十一年大能院殿御寄附なり、下同じ、　四鏡一面　五大鈴鐘像五幅　十二天鐘像十二幅　花籠三十荷　前机一脚　唐銅大香爐一箇　野太刀一振　是ほ右大能院殿の御寄附なり、御紋飛しなり、長五尺餘、　表門　幕に向よ、市中にあり　鳥居　同にて作る、　所　楼門左右

(一) 目白不動尊

（豊島区高田二ノ一二ノ三九）

(二) 目黒不動尊

（目黒区下目黒三ノ二〇ノ二六）

(三) 目赤不動尊

（文京区本駒込一ノ二〇ノ二〇）

(四) 目青不動尊

（世田谷区太子堂四ノ一五　教学院内）

(五) 目黄不動尊

（台東区三ノ輪二ノ一四　永久寺境内）

鶯泉寺　天台宗、東叡山の末、寒淑山と號す、開山は慈覺大師なり、寛創の年月詳ならず、中興開山根誠正歩順は護國院住職にして、霞山を兼ねし、明暦三年三月二十八日　○　寂す今は東叡山より僧を遣りて事を管せしむ、

にカ士の像　石階門の内にあり、八十餘級、　地藏堂　九尺四方、本佛の立像長二尺五寸、本堂の側に在、以下の諸堂皆本堂の左右及び後背にあり、　稲荷社　神體木像長三寸許、平上に寶珠を抱ぐ、

石不動　長二尺許　大行郎横現堂　六尺四方、本にて作れる立像長二尺許手に拾を持、寛永年中御造ありしと堂なりといへば、　釋迦堂　三間半に四間半、本佛立像、長二尺五寸、經藏の二字　八幡宮　神體は坐像にして長一尺五寸、　鹿軍神　寄山茶寄稲なりと云、小祠、　鹿軍神社　神體は本像長四寸餘、形不動に似たり、　早尾横現社　陸出に甲冑して剣を挿じたる本像を安す、　神體坐像、長二尺許、是も寛永年中御造ありし祠なり、　虚空藏堂　六尺四方の堂なり、虚空藏の本像、長一尺五寸、　鬼子母神堂　六尺四方、鬼子母神の本像、長一尺五寸なり、　天神社　神體は本像にして長一尺二寸餘、小祠なり、　吉祥天女社　大日堂　御佛の坐像長三尺許　太神宮　二間に二間半、神體本像長二尺ばかり、　太子堂　六尺四方本尊は立像にて長三尺許、　閻山堂　本像長二尺ばかり、　観音堂　九尺四方本尊は本像にて長六尺四方慈覺大師の坐像を安す、長一尺七寸餘、是も寛永年中御造ありし堂なり、　大黒堂　三間に二間、本像長二尺許、又惠比水神宮　愛染社　二間四方、本にて彫たる坐像なり、長一尺五寸、　狗結龍　石階の下に坐あり、弘法大師、狗結を以て地をうち給ふに、水涌出すよつてこの名あり、　鹿居松　寛永元年御製の本に此りしかばこの名あり、或は鹿掛　拝天社　門を入て左にあり、一間に一間半松の松とし云、　拝殿二間四方、拝殿三間半に二間向拝一間四方、神體は本像にて長一尺七八寸、別當寺中興生順堂に拝天を信しけるにより、平生拝礼せし像をこゝに安置せりとぞ、前に鹿居をたつ、以下の諸堂はみな石階の下にあり、　地藏堂　三間四面、本佛にて長四尺五寸、又堂なり、堂と云、　観音堂　四間四方、本尊は本佛、坐像長三尺許、又秩父及奴茶西國の札所殿堂を安す、三尊としに御像なり、　勢至堂　二間四方、本尊は本像、長三尺餘、　稲荷社　前不動堂二間に二間半、本佛坐像、長三尺許、　三佛堂　八間に五間、釋迦、彌陀、藥師の三佛を殿、長各三尺許本にて作れる坐像なり、この堂は別當寺住家の位牌所なり、　子安明神　堂は別當寺の位牌所なり、裏門を入て右の方にあり、下の諸堂も同じ、　疱瘡神社　淡島明神社　神體坐像社は九尺四方、神體は本像にして長二尺ばかり、本にて作る、　鐘楼　石階の上本堂の傍にあり、鐘の長二尺許、　鐘楼二尺五寸、長四尺五寸ばかり、　別當

權八・小紫比翼塚

比翼塚と古文　目黒不動前より林業試驗場の方へ行く凡そ半町、右側に石柵を廻らし、新しい稲荷社が建立され、特に眼立つ一境域がある。瀧泉寺門前代々の旗亭『角伊勢』の持地所で、昭和九年末不動尊附近の繁茂に資する爲め、不動前町會と二業組合に土地を提供して、土地の有志が改修を施して、見違へるほど立派になつた處が、所謂『比翼塚』の所在地である。其の昔平井權八と小紫とを合葬した有名な墓で、餘りにも知られ過ぎて居る話である。『昔物語古物會』と云ふ書の中に左の事が書かれて居る。

比翼塚の地下目黒村不動堂の邊頃、今は生茂れる竹藪となりて、其の跡だに定かにそれと知り難くなりしかど、天保より弘化の年間までは、偏小なる小庵室ありて、之を東昌寺と呼べり、此寺卽ち臨濟宗の支流なる普化派にて、そが庭に享保年間俳諧師某が、比翼塚の緣故を略記せし石碑を新たに建てゐる。其處を躡て比翼塚と言ひ傳へたり。その庵室今は廢跡となりて、石碑のみ竹藪の中に遺りぬ。然るに行人坂上なる淨覺寺の隣地、今は農家の所有地となりし竹藪中に南無阿彌陀佛の六字を勒たる古石碑ある傍に、根府川石に比翼塚と彫りたる石碑を建てたるぞ、眞の比翼塚なると里俗は專ら言へり。此地昔は淨覺寺の境内なりしを、何時の頃のことにやありけん、住僧割いて農家に讓與したりとぞ。憶ふに淨覺寺の地當初は東昌寺の地なりしを、後に下目黒の木村に遷りしにやあらんずらん。故木村なる東昌寺には、享保年間建立したりける碑の外に墓標とおぼしきものなく、これに反へ行人坂上なる比翼塚の舊地と言習はし來りぬる處に殘りし南無阿彌陀佛の石塔は、現に延寶の頃に建てしにて、二百年餘の星霜を經たりけんと思はるる、最も殊勝のものにして微妙じくも古色あり、しかはあれども、その傍なる根府川石の塔は、遙かに後の建立とおぼしく、六字の石塔に比視れば、太く新しく見ゆるなり。そのいと淺き墓窠巖も無益の間には似たれども、彼俳諧師が建てたりける石碑の外には比翼塚なしと思ふ者のために點かし侯かし云々。

之に依つて見れば『東昌寺が淨覺寺の地にありしにはあらずや』など、筆者獨特の推定をして居るが、淨覺寺は今の行人坂の上に在りて黃檗宗白金瑞聖寺の末寺であり、東昌寺は普化宗金洗派の寺で、江戸名所圖繪にも『虛無僧寺は瀧泉寺門前と大路の西にありて……』とある如く、不動尊の附近にあつた事は明らかであるから、二者混同は宜しくない。

比翼塚

下目黒3丁目

因州（今の鳥取県）の藩士，平井權八は罪を犯して江戸に逃れたが，延宝7年（1679年）ついに捕えられ処刑された。この權八に思いを寄せる遊女小紫は，悲嘆して墓前で自害した。人びとは，これを哀れんで比翼塚を建てた。その塚が，目黒不動仁王門の前 50m ほどのところにある。

比翼塚

行人坂上の淨覺寺　前述の如く行人坂上川崎氏邸の向ひ側に當る地點にありしは事實で、其の門前に富士見茶屋が在つた事も傳はつて居る。口碑の傳ふる所に依れば、平井權八が捕はれたのは此の淨覺寺で、住僧もその保護に努めたが、遂に幕府捕吏の命もだし難く、外出せしめて捕吏に提へられた。權八處刑を受けた後、隣家の中根穴右衛門と呼ぶ人が、乞ふてその屍を貰ひ受け、墓を建てゝ葬つたのが此地であつたと云ふ。淨覺寺は何時の頃か廢寺となり、白金の瑞聚寺に併合されたので、其跡は無くなつて了つて居るが、小紫の殉死を憐んで後に至つて其墓塚を建てたものであらう。

平井權八の素性　平井權八は因州鳥取の藩士で、頗る劍法に熟練して居た。其時父の同僚である木庄助太夫の次と自分の次とが爭鬪し、自分の次が助太夫の次に負けて咬み殺されたのを怒つて、遂に助太夫を殺して江戸に遁れ來り、其後江戸に於ても亦た罪を犯して遂に刑に處せられたのである。今德川時代の宣書文を蒐めた『温故實錄』にある宣書文を掲げやう。

平井權八

右之者儀武州於大宮原小刀賣を切殺し金銀大に奪取追剝の本人にして其上宿次の證文をたばかり取刺へ手鎖を外づし致缺落候段重々不屆至極に付於品川磔に行ふ者也

延寶七年(二五六年前)十一月三日

雛女小紫との關係　これに就ては世間が餘りに知り過ぎて居るから、國史辭典に掲げられてある一節を引用して、簡單に說明に換へて置く事としやう。卽ち『小紫は江戸吉原三浦屋の娼妓なり。江戸淺草の生れ、親のために身を賣りて妓となれり。平井權八と關係を結びたるが、權八の刑に遭ひて死するや、その葬る所の冷法寺に至り自害して死せり。里人欲めて塚を建て、名けて比翼と云へり、明治中の事なり。』云々。又た坊間に本文にある冷法寺に葬つたと云ふ說も傳へられて居る。又た行人坂上淨覺寺内にありし權八の墓は、後ち品川區大崎の安樂寺に移した由で、現に遺理塚として同寺に殘つて居るのがそれである。

目黒不動（泰泉寺）下目黒3－20

キリシタン灯ろう

大聖院の境内に，ちょっと変わった石灯ろうが三基ある。これは，キリシタン灯ろう，または織部灯ろうと呼ばれているもので，「かくれキリシタン」の遺物ともいわれている。

織部灯ろうというのは，茶人千利休の高弟で，利休亡きあと一流をなした古田織部が考案したもの。キリスト教の影響を受けてはいるが，直接キリシタン信仰と関係をもっていたかどうかは不明である。

この灯ろうは，元千代が崎の松平主殿頭（とのものかみ）屋敷跡の小祠にあったもので，大正15年にここに移された。新田義興の妻千代の墓碑であるともいわれている。

さて，かくれキリシタンの話に戻るが，江戸時代，キリスト教は厳しく迫害され，キリスト教信者は隠れながら信仰を続けていかなければならなかった。直接キリストの像やマリア像を拝することができないので，代わって形の似た織部灯ろうを信仰の対象にしたものらしい。そして，人びとを避けるため，またはほかの人が嫌ったためか，キリシタン灯ろうには，禁忌な伝説が多くある。次の話も，かくれキリシタンに関係しているのかも知れない。

寛政のころ，土手四番町に住んでいた春日半十郎という旗本の家で，夕食時になると，食卓が宙に舞い上がるという珍事が毎日のように起こった。初めは，キツネかタヌキの仕業か，神仏のたたりと思って修験者を呼んでお払いをしてもらったが，いっこうに効き目がない。そのうちに，付近の家にも次ぎ次ぎと同じことが起こるようになった。

そのうわさを耳にした戸田三蔵という旗本が，春日の家にやってきて

「それなら拙者が封じてやろう」

といって，奉公人を全部集めて住所を聞き，近ごろ雇い入れた3人を解雇してしまった。

すると，その夜から何も起こらない。不思議に思った春日が尋ねると，

「実は，拙者の家でも同様のことがしばしば起こったので，近所の者に聞いたところ，目黒の者を雇い入れると不思議なことが起こるというので，目黒者を全部里に帰したら，別条なくなった」

戸田はこう答えたという。

◇

このほかにも，目黒者を嫁にもらうとたたりがあるとか，目黒者を雇うと夜中に奇妙な振る舞いをするといったような伝説がいくつか語り伝えられている。

大鳥神社

下目黒3丁目1—2

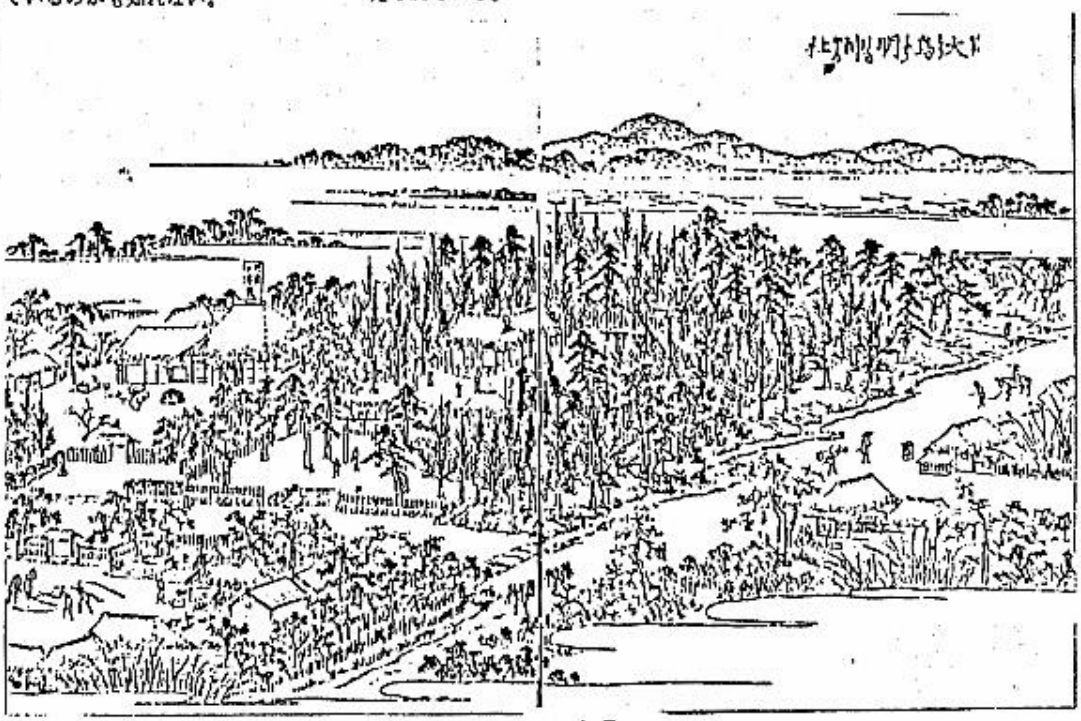
日本武尊（やまとたけるのみこと）を祭る目黒で最も古い神社の一つで，国常立命（くにとこたちのみこと）・弟橘媛命（おとたちばなひめのみこと）が合祀されている。

景行天皇の御代，目黒の地に国常立命を祭ったお宮があった。日本武尊が東方征伐の途中，当地をお通りになった。そのとき，家来が大ぜい目の病気にかかってしまった。すると日本武尊の夢の中に国常立命が現れ，「木の実がよくきく」とお告げになった。尊が家来たちに早速，木の実の汁をつけさせると，たちまち治ってしまった。これをお喜びになった尊が，十握・八握の剣を奉納された，という話が伝えられている。

大鳥神社は，この日本武尊東征の遺跡の地に大同元年（806年）創建されたもので，現在の社殿は，昭和37年に完成したものである。

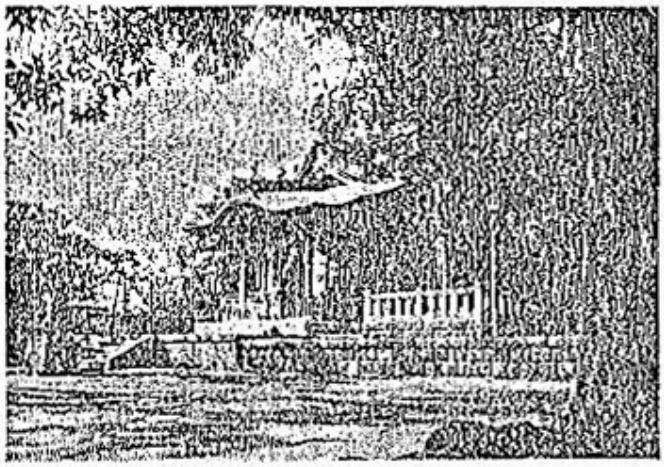
●太々神楽（剣の舞）

大鳥神社に古くから伝わる太々神楽は，日本武尊の徳をたたえ，十握の剣を背に，八握の剣を使って舞うもので，毎年9月の例祭（9日に近い土・日曜日）に社殿で行われる。



←地図 大鳥神社
下目黒3－1

祭神は日本武尊。目黒目の総鎮守。この神社に古くから伝わる太々神楽や目黒の「酉の市」は有名である。境内のオオアカガシは変種で、都の天然記念物に指定されている。



古代に創建されたと伝わる目黒大鳥神社

（目黒先賢事蹟）

大鳥社　殿地九百九十八坪、字新屋敷にあり、本殿二間に三間東に向ふ、祭神は日本武尊、大同年中の創建なり、當村及び中目黒両村の鎮守なり、鳥居あり、社間九尺六尺、神樂殿本鳥大明神の五字を掲げ、鳥居の内外に石燈あり、社の側にあり、二間に二間半平々、稲荷社本社に向て右にあり、小祠前に鳥居の日神宮を祭す、九月九日祭礼の日神輿を祭す、

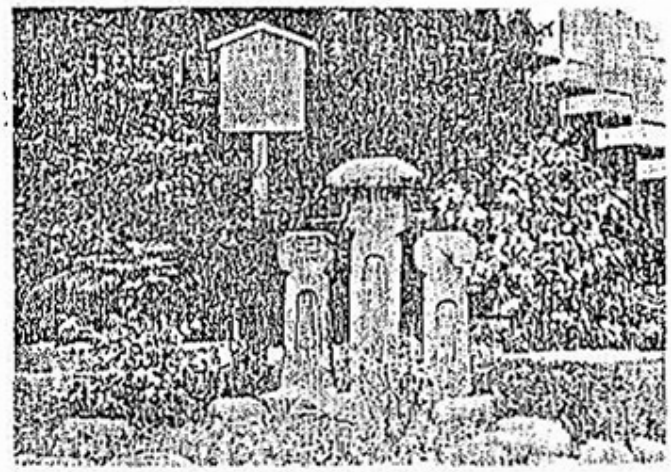
別當大聖院本社の隣にあり、天台宗、當寺東松公山と號す、開山良順僧正永禄五年八月八日寂す、客殿四間四方東に向ふ、本尊阿彌陀如來、見かへりの阿彌陀と號す、長五尺餘、京都永觀堂の像を摸刻せし像なりと云、境内に青木牧野が墓碑あり、碑面に甘藷先生墓と題し、神社に甘藷を植しことをしるしたり、

大鳥神社（下目黒三－一－二）　太鼓橋を渡って進むと山手通りへ出る。右手四つ角にみえる森が大鳥神社。古代目黒川の流域にあった集落の氏神として国常立尊を祀った小社であった。日本武尊が東夷征伐のときに立ち寄り、平定の祈願をした。日本武尊はその後、伊勢の能褒野でしくなったのでその霊を祀り、国常立尊と二柱の神社となった。

大同元年（八〇六）神勅によって社殿を造営し、大鳥神社と称した。いまは第一殿媛命も祀って三柱の神社で、例大祭は九月九日。酉の市は、他の鷲（大鳥）神社と同じように行なわれ、目黒の「おとりさん」といわれている。

社地内のオオアカガシは都指定の天然記念物で、葉が大きく珍しい。

大聖院（下目黒三－一－三、大鳥神社隣り）　目黒不動滝泉寺の末寺。弘治三年（一五五七）良順僧正の開山。江戸時代までは大鳥神社の別当であった。本尊みかえり阿弥陀像は戦災で焼けたが、京都永観堂の仏像を模刻し、かしらをかしげていたので、みかえり阿弥陀といわれた。そのかわりとでもいうか、むかしはなかったが、現在、話題をなげているものがある。それは三基のキリシタン灯籠である。前記松平主殿頭抱屋敷にあった三体地蔵のことで、織部形灯籠に似ている。その一基の両側につぎのような詩がある。



大聖院のキリシタン石灯

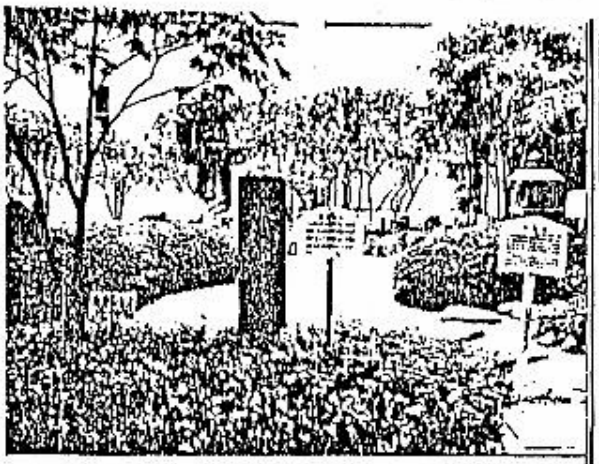
（目黒先賢事蹟）

鄭上舗花又一重　碧松元心風来吟

目黒区守屋教育会館郷土資料室（五木木二―二〇―一七）芦毛塚から田切公園の前を過ぎ、諏訪坂を越え、五木木西店街通りを経て、小学校通りへ左折し、東横西架線を横切ると、鉄筋四階建ての守屋教育会館がある。その一階が郷土資料室となっている。

郷土資料室は、昭和三八年、守屋図書館の増築に際し、同館に設置されたのが始まりであり、ついで昭和四六年、守屋教育会館の設立により、当館内に移転されたものである。本室の資料数は、約一六〇〇件、四〇〇〇点、参考図書は、約一二〇〇冊、いずれも目黒に生きてきた人々の歴史や民俗を知るうえでかけがえのないものである。

一階の展示室には、目黒区を中心とする地域の考古資料・古文書・民俗資料を展示し、廊下には「目黒の昔と今」の史跡・名所・文化財などの美しいカラー写真、中庭には庚申塔・道しるべなどの石造物を緑の植込みの中に配置し、区民の教養・調査・研究等に役立てている。ここの一室で、目黒区の歴史の歩みや文化財の流れを大観し把握することができるのは、まことに好都合である。資料室を見ながら、今までの散歩のあとを確かめ、これからの散歩の進めかたを考えてみよう。



守屋教育会館郷土資料室中庭

目黒区では、昭和三四年七月、区民に、目黒区の発展の歩み、さらに郷土の正しい歴史を理解していただくことにより、都市化の進んでいく中で消え失せようとしていた郷土愛を回復し、より豊かな人間関係や連帯意識で結ばれる明るい楽しい目黒区の実現のために、失われつつある郷土の歴史を「目黒区史」にまとめることにしたのである。

区史は、その後三年の歳月を費やして、昭和三六年一二月、東京都立大学の編纂により発行されたが、その間、区民から貴重な郷土資料が数多く寄せられた。

区では、これらの郷土資料をただ単に保存するだけでなく、一般にも公開し、より多くの人々に見学していただき、郷土目黒の歴史を知っていただくため、昭和三八年一二月、守屋図書館の増築を機会に郷土資料室を開設した。そして、区史の発行と同様、明治百年記念事業として守屋教育会館が建設され、昭和四六年四月開館されると同時に、郷土資料室は現在の守屋教育会館の一階に移転した。

守屋教育会館の郷土資料室

祐天寺

中目黒5丁目24—53

享保3年(1718年)祐天上人によって開山された浄土宗の名刹である。

祐天上人は陸奥国石城郡新舟村の生まれで，12歳のとき芝増上寺内の池徳院に入り得度した。のち観通上人の弟子となり，元禄12年(1699年)下総の大巌寺の住職を勤め，以後弘経寺，小石川伝通院を経て正徳3年(1713年)，77歳のとき増上寺の住職となり，大僧正に昇進した。

当時，下目黒村の萩久院で念仏修行を勤めたことがあり，かねてから念仏道場を開くことを念願していたが，果たせないまま享保3年，82歳で他界した。

遺志を継いだ高弟祐海上人は，将軍吉宗や寺社奉行に働きかけて，新しい寺院建立のために尽力した。しかし，折からの幕府の厳しい制約のため思うように事が運ばず，やむなく祐天上人ゆかりの萩久院を買い取り，ここに本堂・庫裡を完成（享保5年）させ，祐天上人の没年を開山とした。享保7年（1722年）には，将軍から明顕山祐天寺の山号と寺号が授与された。

境内にある祐天上人の墓は，昭和17年，都の旧跡に指定された。

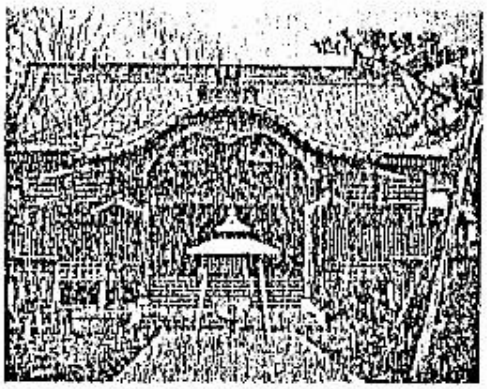
●本尊　阿弥陀如来坐像

本堂左側の阿弥陀堂に安置されている阿弥陀如来坐像は，名工安阿弥快慶の傑作といわれる。

このほか，本堂には元禄～享保年間の大仏師法橋石見の作である木造祐天上人坐像（都有文），般若心経1巻や紺紙金字法華経巻第3の1巻（いずれも都有文）など逸品が多い。

木造祐天上人坐像

祐天上人の墓



祐天寺本堂

名碑と名苔

鄙ふ蝶の音川くほどのみやまかな

山門内の句碑に昔の面けさがしのばれる。

祐天寺

境内八千五百三十坪、内邦領地二千坪、年貢地六千五百三十坪、村の西の方字原にあり、當寺の邦領地は中下田

黒澤村にて千坪づゝたまはれども、其時段來當村に屬すれば、こゝに用ゐず、淨土宗、芝增上寺末、明和山善久院と號す、當所は增上寺第三十六世祐天大僧正隱居の地なり、僧正宋朝に信弟祐海に屬して、當寺を起立せしむ、寛保四年祐海建命を來して起立の功を遂げ、僧正か 門冠木門なり、 下馬 開山として其身は第二世にあり、 門柱の間二間、 札 木戸にあり、明和三年七月八日土 二王門表門の正面にあり、五間に 二間、明頭山の三字を扁す、 鐘楼二王門を入て右にあり、 左右に力士の像を安す、 本堂二王門の正面にあり、その間を覗 に寛保十三年と刻す 三字を扁す、木造は祐天大僧正の木像なり、坐像にして長二 尺八寸ばかり、手に念珠をかけて合掌の姿なり、三輪利鎌の 作なり、脇立の像あり、觀世音菩薩小左衛門と云もの、子なり 上人と號す、 時鳥國君妹の農新妻小左衛門と云もの、子なり 幼名を三之助と稱す、三輪山の諸化体遊和尚は俗縁の伯父た るにより、休遊を紹介として同所發谷檢遊和尚に授じて弟子 す、時に正保四年僧正年十一歳の時なり、長ずるに及で學業 志ち学、師根通に隨て關國を遊行し、道德日々に盛なり、後 三輪山に庵を結び、又碧師郡牛嶋と云所へ潛隱す、遊化大に 行はれて信仰輝榮す、又碧翔山川に赴きて念佛を唱む、その 後佳昌院殿の石により大城に登れり、元祿二年當寺院の 命を蒙り下總國千葉郡大巣寺に住せしめらる、明る庚辰 年增上寺に住し、大僧正となり、文政院殿の御祈願を勤む、 程なく隱居して享保三年七月十五日寂布の別墓にして寂す、 墓見の中に殘りし香形は今も當寺に持傳へり、本堂の後背に 建き九尺四方の堂中に祠を かく、勅願の二字を扁す、 客殿 祠の後二尺高四尺、安永七戊戌十一月六世師命と刻る 本堂に向て右の方にあり、師下を殺て往來を通ず、この 客殿はもと佳昌院殿の御殿なりしを賜りて造りしと云、 阿 彌陀堂 門を入て右にあり、寅の方に向ふ、四間に六間、松 平大膳太夫法名瑞泉院建立本尊は座像にして長二尺五寸、堂外に圓光大師御遺 地藏堂 阿彌陀堂の向にあり、三間 跡の七字を扁せり、 に五間半、申の方に向ふ、 開山本地藏尊の七字を扁す、扁額開山本地堂の五字は鮮明 居士香山邦智と落款あり、堂中に南無地藏菩薩の六字を扁 し、善久院當寺六世 阿彌陀堂 地藏堂の側に有、三間半四 祐金書と落款あり、 方、阿彌陀堂の四字を扁す、 當寺二世祐海の落款あり、 本尊木彫座像にて長三尺、 經藏 同堂にあり、二間半四方、 經藏の二字を扁す、本尊阿

彌陀如來坐像にて長二尺五寸、 雉野稲荷合祀 九尺に一間 同堂にあり、 裏門 堂後にあり内に下馬札 ○長泉院 年貢地七千三百八十三坪下田黒村の方へ たつ、 よりてあり、古俗に新寺と唱ふ、淨土宗 芝增上寺末、高崎山大乗寺と號す、寶暦の頃江戸の人北川 宗道と云もの、、 增上寺第四十四世大玄和尚を信し、 律院起 立の大願を起し、眞淵無能寺の不能律師にはかり、多摩郡下谷 本村長泉院と云御家の寺を當所へ移し、大玄の弟子千如上人 を請して開山とし、時に寶暦十一年なり、これより 寺は淨土律院を號す、 正は寶暦六年八月四日入寂ありしかど、 抛て僧 正を開山とし、千 門南に向ふ、冠木の間九尺、門柱左右に 如を開基とす、 石燈二基を立つ、右に開光東漸大師筆 塔と刻し左に眞宗酒 肉精制の由を彫る、 本堂六間に四間、東に向ふ、長泉律院 如來は 四字を刻す、本尊阿彌陀如來は 慈覺大師の作、 鐘楼三間半四方、鐘の長二尺五寸、高四 本佛坐像長三尺、 尺、銘文の略に曰ふ、增上寺第四十五世前大僧正成譽玄大和 尚風以荷法自任、高崎千如上人為我當國古鐘利、山號高崎、

祐天寺堂内之図

正覚寺

中目黒3丁目1—6

元和5年（1619年），日栄上人によって創建された日蓮宗の寺院である。初めは神文谷法華寺（今の円融寺）の末寺であったが，元禄4年（1691年）に法華寺同様，幕府から弾圧を受けたので，急きょ身延山久遠寺の末寺となり，その難を免れた経緯がある。

やがて，京都の行徳寺から4世日猷上人を迎え，後の隆盛の基礎を築いた。

しばらく栄えた寺も，やがて衰えさんたんたるありさまとなったが，安政年間（1854～1859年）に5世日慈，6世日機両上人の努力により，元通りの復旧を成し遂げた。

このことから，同寺では日猷・日慈・日機の3上人を，正覚寺中興，再興の恩人と呼んでいる。

三沢初子像

三沢初子の墓（正覚寺）

●浅岡の局との縁故

境内には，仙台の伊達家第3代綱宗の側室である浅岡の局，三沢初子の墓（都旧跡）がある。

三沢初子は，浄るり・歌舞伎などで有名な「伊達騒動」に登場する"先代萩の政岡の局"のモデルといわれている。初子は，4世日猷・5世日慈の両上人に深く帰依していたし，父母もここに葬られたということから，正覚寺との縁はことのほか深かった。彼女が亡くなったあと，遺骨によってその墓石は寺に寄進され，本堂・庫裡などの建築にあてられた。また，子の伊達綱村公（幼名亀千代）も母を弔い，その後当山に特別の保護を加えられたという。

鐘楼の横には，昭和9年に建立された三沢初子の銅像もある。この像のモデルになっているのが名優6代目尾上菊幸の弟子尾上梅朝で，彼の厚意による女形の扮装をもとに製作されたものである。

●鬼子母神像

鬼子母神堂に，伝教大師の作といわれる鬼子母神像が安置されている。霊験あらたかで，三沢初子が亀千代の武運長久を祈ったと伝えられている。

○正覚寺　境地七百四坪、本寺地二千九百八十七坪、村の東北の側上目黒村の堺にあり、法華宗、身延久遠寺末、宝相山と號す、開山法泉院日安聖人、寛永十一年三月二十八日入寂、客殿八間四方、水堂三間に二間四方、鬼子母神堂三間四方、番神堂の三字を扁す、三十番神堂客殿の右右隣の上にあり、三間に二間、拝殿二間四方、堂の内に鬼子母神の四字を掲ぐ、本尊は慈覚大師作にして霊験あらたなり、仙台伊達家より帰依により、今に至るまで仙台より堂宇を修理ありと云、

古碑一基境内にあり、延安三年十月と彫る、

淺岡の墓と伊達騒動

芝居で有名な『千代萩』の主人公政岡の墓と云ふのが、中目黒二丁目の正覚寺にある事は、寺院の項に於て正覚寺の條に記してあるが、此の墓は五輪塔で一級に一字宛『妙法蓮華經』と刻み、最下の經の字の下正面の中央に『淨願院殿』その右に『了獄日蔵』左に『大姉淑蔵』と三行に彫り、裏石には貞享三丙寅稔(二四九年前)二月四日卒、花立に池田氏とそれ〴〵刻んであり、周囲は石柵で囲んである。

伊達騒動實録　伊達騒動に關しては色々の說があつて、何れを眞とも見定め難いものがある。然し文學博士大槻文彦氏の著になる『伊達騒動實録』と云ふ書は、就中最も詳細正確なものであると云つてよい。その書中淺岡卽ち三澤初子に關する條に左の如く書かれて居る。

三澤初子は綱宗の寵妾なり。其父三澤藏化清長は、江州坂田・犬上二郡の主三澤頼母助爲基の次男にして、濃州大垣の城主氏家志摩守廣忠の養子となりたるが、慶長五年關ヶ原の戰に大阪方に屬して敗北し、廣忠は細川三齋に預けられ、清長も從ひて行けりと云ふ。此時初子は叔母の許に寄れり。叔母は池田輝政の女にて、家康の養女となりたる振姫の侍女にて紀伊と云へり。元和三年振姫伊達宗忠の室となるに及び、初子を從へて之に從ひ。偖て年を經て、初子の容姿艶麗性亦た頗る怜悧なるより、忠宗夫人振姫と相議し、其子綱宗の側室となさんとし、之を紀伊に謀れるに、紀伊の曰く「此女今寄りて孽が許にあれど、家柄と名家の出なれば、若し正妻ならば確みて命を棄ぜんも、側室ならば辭ず」と、忠宗遂いて竹腰、明暦元年正月吉日を卜し、江戸の邸に婚儀を結べり、但し妾は側室とせり。初子綱村(幼名亀千代君)外二名の男子を産む。

伊達騒動の眞相　次に此の伊達騒動の眞相に就てであるが、是は伊達兵部派と伊達安藝派卽ち重役間の勢力爭ひであつたらしく、伊達兵部派の原田甲斐を初め渡邊金兵衛等の好侠なる張が、反對派を陷るゝに手段を選ばず、常に猥褻非道の事のみを敢てし、綱宗を誘つて放蕩に耽溺せしむる等の悪計を廻らした。之に對して正義派とも云ふべき伊達安藝等の一味は、常に不正義派の悪計に對抗して、嚴正の方法を以て綱宗を諫つたのである。よく歌舞伎芝居でやる樅の事は明らかでない。寛文二年伊達河野道圓が刺せられた事があり、此時に亀千代の擁守役であつた鳥羽と云ふ女も同時に刺せられたから、或は彼等が兵部と通じて毒を盛つたのではあるまいかと憶測するものもあるが、其の罪の何であつたかも不明であり且つ証拠の證據と云ふものもない。又歌舞伎でやる政岡は初子のことであるが、初子は幼君の生母であつて乳母ではな

い。然して初子が幼君擁護に苦心した事は傳つて居るが、芝居で演ずる樣な事實は少しも傳はつて居らぬ。殊に初子は品川の邸に在つた鍋宗侯の側らに侍して居たのであるから、上尾敷の幼君の側に始終附き添つて居ると云ふことは出來なかつたのである。

龜千代周圍の者　龜千代君の懷守役には、その家督の時から橋本善右衛門高信・大松澤甚右衛門實泰・日野次右衛門信安・富田二左衛門氏紹等が付けられ、孰ひに此等の懷守役は、いづれも誠忠無二の臣で、日夜君側を護つて離れず、奸臣小姓頭金兵衛・大町權左衛門等が、職務として君側の用を勤めたけれども、懷守役の監視には十分の隙もなく、如何に惡計を逞しうせんとしても、到底その志を遂する事は出來なかつた。時に懷守役を陷穽せんと謀つたけれども、田村左京亮の保護があり、此の策も亦た奈何ともする事が出來なかつたのである。

淺岡の墓と異說　記錄には淺岡と云ふものも、又た政岡と云ふものも、更に松前錢之助と云ふ人物も、一切傳はつて居らない。然して仙臺の孝勝寺と云ふ寺に政岡の墓があると云ふのは、初子の墓の事であらうが、此の墓を初子の乳の墓地であると云ひ、正覺寺のそれは初子の供養塔であると云ふ說もある。又中央新聞に揭載された記事であると云ふ註をして『花原風土記』稿に揭げてあるものは

乳人淺岡と云ふ人は實際ない。伊達安藝の妹と顯秘錄に書いてあるから、安藝の子孫今の亘理氏の家を訪ねて古文書を見たり、種々尋ねたが、安藝の妹には天童右近の妻で、右近歿後後宮へ奉公したと云ふ事が分つて居る許りだ。又た三澤初子と云ふ女が守役で忠義を盡したと云ふ傳へがある。此の子孫も仙臺にある、之を政岡に作つたものかと思ふ。また松前錢之助の家は代々八千石である、その子孫に尋ねて見た處、騷動の時の書類を拵いてその家を靈に收め、庭中に祀を建てゝあつただけで、何事も傳はつて居らぬと云ふ答へであつた。

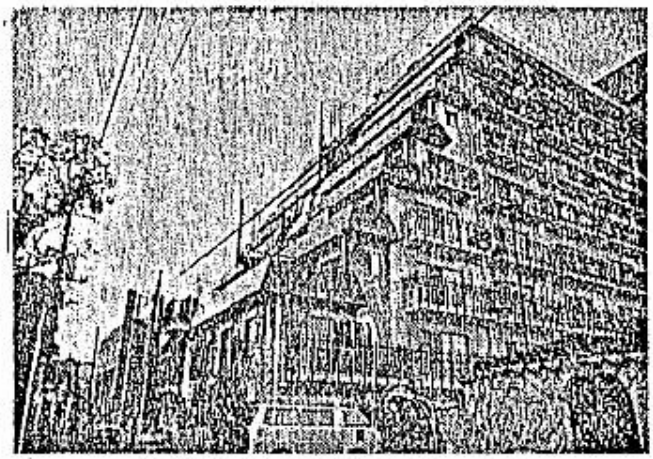
と書いてあつた。要するに之を種々の方面から考證して見るに、初子は側室ではなくて正室であり、始終品川の邸に居たと云ふ點から推しても、正覺寺の墓は供養塔でなくて、眞の墓地であるに相違ない。只だ『千代萩』の作者が、假り此の生母の初子を乳母の政岡と――演劇的効果を狙つて創作したもので、政岡之局が初子であることには、一點の疑ふ餘地もない。卽ち正覺寺に存する古記錄は勿論の事であり、其他初子歿後二百五十年の後、伊達家一門その他の名士に依つて、銅像まで建設されて居る事實に徵しても、是等の疑惑を一掃するに充分なものがある。

目黒氏館跡（中目黒一―一）　正覚寺を出て、駒沢通りの交差点をこえ、目黒川のさいかち橋を渡り、右手の道をのぼっていくと、目黒高校がある。さらに右に進むと、高い壁を立てかけたような別所坂に突きあたる。

この辺一帯は、淀橋台の南縁にあたり、中目黒一丁目から上目黒一丁目を経て青葉台一丁目に至る台地は、大変高く、急な長い傾斜地が続き、槍の穂のように突き出た地形から鉾が崎ともいわれ、広くは別所台と呼ばれていた。高い台地上からは、遠く富士の霊峰をはじめ武蔵・相模の山々も望まれて眺めもよく、近くは目黒川・蛇崩川を挟んで、対岸の目黒台・諏訪山の丘陵とともに、攻めるに難く守るに固い要害の地を形づくっていたのである。

目黒氏館跡

中世の目黒の豪族、領主目黒氏も、この高台に目をつけ、居館を定めたのであろう。『吾妻鏡』や頼朝の功賞状の中にも、目黒弥五郎・目黒太郎義政・目黒別所五郎左衛門義盛らが、戦功を立てて目黒の領主となったことが記されている。また『新編武蔵風土記稿』にも、この史実を裏付けるように、「上目黒の東方渋谷村の境にあり、此辺に木立茂りて一村を為せる所あり、此地は昔何人か住せし館地と見えて今も四辺に溝堀の跡と覚しき堀残れり」と載せている。



目黒館跡と伝わる別所台（中目黒1―1付近）

別所台に目黒氏の居館があったことはかなり可能性があると思われる。このことをいっそう証拠立てるように、昭和五二年六月二九日付けで、東京都教育委員会から、目黒区遺跡地図の中目黒一―一に「目黒氏館」が追加されたのである。これは東京都教育委員会の委託により、青山学院大学講師の伊礼正男氏の「中世城館所在調査」の調査結果に基づくものであるといわれる。

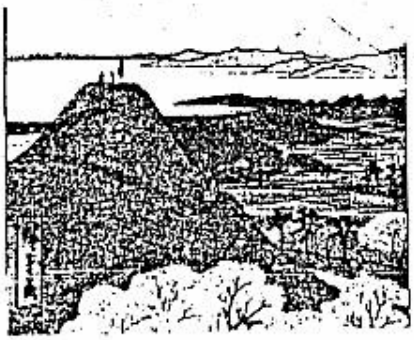
目黒の元富士
（一立斎広重「名所江戸百景」のうち）

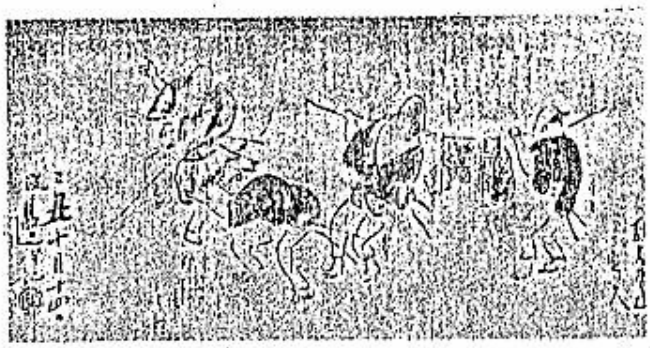
新富士跡（中目黒二丁目二六）　上目黒の元富士に対し、新富士と呼ばれ、文政二年（一八一九）近藤重蔵が鎗が崎の別邸に築いたもので、六月の山開きには大いに賑わい、江戸名所の一つとなっていた。しかし現在では山がこわされ、国際電々会社研究所の庭に、題目碑・小御嶽碑・戊申碑の三つの碑石が保管されている。

文政九年ごろ、拱色の美しい、平和な鎗が崎の地に、突如大事変が起こった。それは、土地争いがもとで、近藤家と隣りの塚本家との間に起こった殺傷事件のことであった。この事件は黒台の変といわれ、芝居にも山開目黒新富士と題して紹介されている。この事件で近藤重蔵の長子富蔵は、隣りの一家五人を斬殺し、使用人二人にも手傷を負わせてしまった。その結果、父は近江大溝藩にお預け、富蔵は八丈島へ流された。富蔵は流罪の身となっても、在島六〇年、旗本の誇りを失わず、前非を悔いて仏門に帰依し、よく孤島の困窮に耐えて、島の歴史・民俗を調査して記録し、不朽の名著『八丈実記』を残したのである。

新富士の碑3基（鎗が崎，近藤重蔵屋敷跡内）

江戸では安永八年（一七七九）、富士講の先達の藤四郎という者が戸塚村に富士山をかたどって築山を造り、浅間神社を祀った。これが評判となり、朱楽管江の洒落本『大抵御覧』などにも書かれ、以後、同様の富士が江戸中に何十カ所もできた。六月一日の山開きは前夜からの参詣でにぎわい、江戸の年中行事化した。





渡辺崋山筆『目黒詣』

⑤ 新富士と富士講　中目黒２－１

新富士は元富士におくれること７年、文政２年（1819）に三田村鳶魚が鎗が崎の近藤重蔵の邸地内に築かれた。元富士に対して新富士、一名を近藤富士ともいった。重蔵は邸地が高台で見晴らしがよく本物の富士山の眺めもすぐれていたので、三田用水の水を滝に落として山水の庭園を造った。新富士の築山は江戸の富士講仲間が奉仕し、１日に1000人の人数で２か月かかって築いたという。富士講の人たちは浅間神社や教祖の身体をまつり、６月の山開きには登山し護摩式を行ない餅をまいたりしたので、講員や一般の参詣者で賑わった。新富士は取崩されて現在は国際電々研究所の一隅に３基の碑があるだけである。

④ 馬頭観音堂　渋谷区恵比寿3－9

別所坂から恵比寿へ下る坂の左側にあり、享保のころこのあたりに悪病が流行し、祐天寺の祐海上人に加持祈禱を願い、石で観音を造りここに安置した。坂を下った右側に道標がある。この道は目黒～江戸の最短の道だった。

⑥ 別所坂庚申塔群　中目黒1－1

椎の木に囲まれた小堂の中に6基の庚申塔が並んで安置されている。近くからここへ集められたと思われる。

日蓮宗系の文字塔が2基、青面金剛塔が4基で、寛文から明和にわたる年号が刻まれている。

文化施設

東京都近代文学博物館

明治・大正・昭和にわたる近代文学に関する資料を収集、保管し後世に伝えるとともに、これらの資料を活用し、近代文学の研究や教養の向上に役立てるため、東京都が駒場公園内の旧前田侯爵邸洋館に博物館を設け、昭和42年に開館した。

所蔵されている資料には、文学作品の初版本、雑誌の創刊号をはじめ、作家の原稿・書簡・色紙・短冊の類、写真遺品などがある。

当館の所蔵資料を中心とする常設展「近代文学の流れ」と、特定のテーマに基づいて開く特別展の2つの展示会ほか、文学に関する講座なども適宜開催している。開館以来の主な展示会は、徳富蘆花展、芥川・直木賞展、武者小路実篤展、独歩・花袋・秋声三人展、近代詩歌展、高浜虚子展、山本有三展、下町の文学展など。

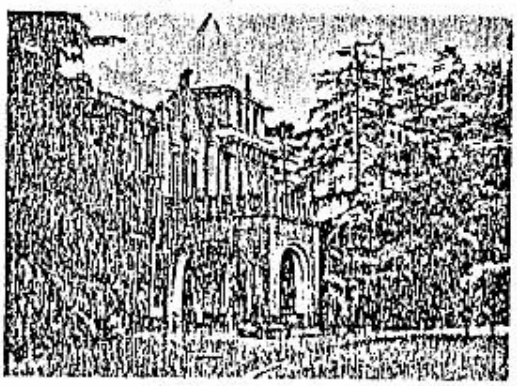
所在地…駒場4丁目3－55
開館時間…午前9時～午後4時
休館日…毎週月曜日、祝日、年末年始
入館料…無料

日本近代文学館

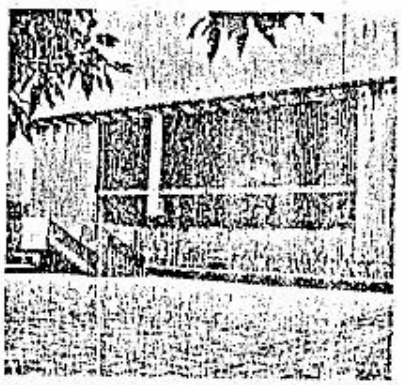
故高見順氏らが中心となって財団法人として発足、昭和42年開館した。

日本の近代文学に関する図書・雑誌・原稿・遺品などを収集保存し、近代文学の研究に資料を提供している。展覧会や講演会を随時開催。

所在地…駒場4丁目3－55
開館時間…午前9時30分～午後4時30分
休館日…毎週日曜日、祝日、月末、年末年始
入館料…展示室は100円（20人以上は80円）、図書室は150円



東京都近代文学博物館



日本近代文学館

日本民芸館

昭和11年，故柳宗悦氏が開館。

主に，江戸時代の民衆の生活の中から生まれた焼き物，織り物などの民芸品1万点以上が収蔵され，常時1,000点が展示されている。

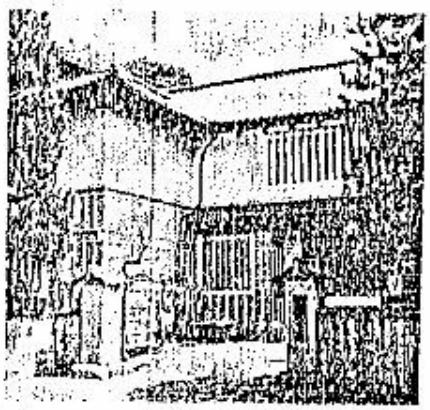
日本の伝統を生かし，大谷石を材料とした耐震・耐火の蔵造り，和風の落ち着いた美しい建築物である。

所 在 地…駒場4丁目3—33

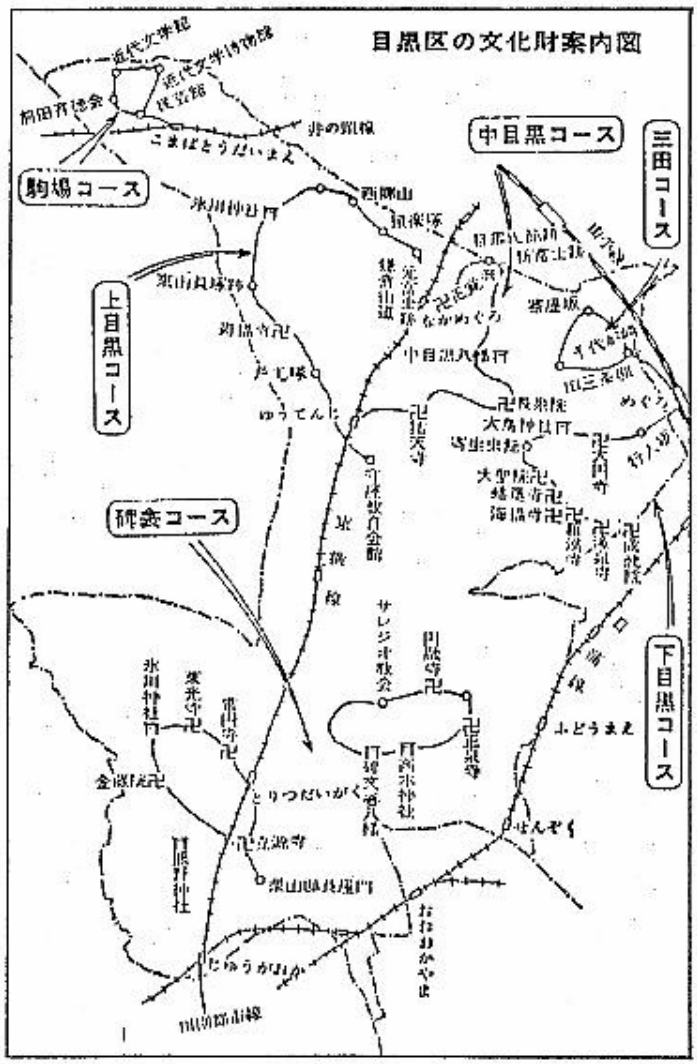
開館時間…午前10時～午後5時

休 館 日…毎週月曜日，年末，1～2月

入 館 料…小学生100円，中学生～大学生300円，大人500円(団体割引あり)



日本民芸館



参考文献

黒目黒区文化財めぐり案内　：：目黒区教育委員会刊

区勢概要「めぐろ80」　：：目黒区役所刊

目黒区の歴史　：：目黒郷土研究会　㈱名著出版社

目黒区史跡散歩　：：山本和夫著　㈱学生社

東京歴史の散歩道　：：鈴木一行著　㈱第一法規出版社